



会長 紺野 広 青少年奉仕 夏川戸 齊
副会長 橋本 昭一 幹事 松本 剛典
クラブ奉仕 橋本 昭一 会計 妻神 和憲
会長エレクト 橋本八右衛門 会場監督 佐々木泰宏
職業奉仕 道尻 誠助 直前会長 小林 幹夫
社会奉仕 岡崎 孝文 副幹事 小田山紀暢
国際奉仕 鶴飼 寿栄 会計補佐 小井田和哉

例会日 毎週水曜日 12:30 例会場 八戸グランドホテル
事務所 八戸市番町14 八戸グランドホテル内
電話 (43) 0608 FAX (43) 0661
e-mail rc8@vc.hi-net.ne.jp
http://hachinohe-rotary.org/
会報・広報委員長 峯 正一 同副委員長 上村 奉樹
同委員 妻神 和憲 同委員 野村 一雄

国際ロータリーのテーマ — 2023~24 — 八戸ロータリークラブのテーマ
世界に希望を生み出そう 和而不同 (わじふどう)

国際ロータリー会長 ゴードン R. マッキナリー

八戸ロータリークラブ会長 紺野 広

3月 は 水 と 衛 生 月 間 です

第3305回例会 2024.3.6

- ▶ ゲスト 日本赤十字社国際部国際救援課
救援係長 松山勇樹さん
(13:00よりZOOMでのプレゼンテーション)
- ▶ ビジター：南グループガバナー補佐
吉田賢治さん

会長要件 紺野 広 会長



2月7日、ポーランドへのロータリー青少年交換留学生、右近彩葉さんから、ウクライナ紛争の戦禍から逃れポーランドへ避難した児童達への支援活動に関する卓話を戴きました。素晴らしい御話して感動致しました。その後、当クラブとしても、右近さんのスポンサークラブで有る、大阪ロータリークラブと一緒に支援活動が出来ないかを検討致しましたが、右近さんの居る地区の児童達が、既にウクライナに戻ってしまった為、右近さんを介しての支援は、大阪ロータリークラブでも、現在は出来て居無いと言う状況です。タイミングが少しだけ、遅れてしまった様です。只、右近さん、

大阪ロータリークラブは、引き続きウクライナ紛争に関連した支援活動を模索して行くとの事でしたので、活動方針が決まった際には、御連絡を戴く事として居ります。其の際に、我々が出来る事が有れば、考えて行きたいと思えます。皆様にも御相談する事が有るかも知れません。

さて、国際的な分野で奉仕・支援活動している企業、個人は、大阪ロータリークラブや右近さん以外にも沢山御座います。それら活動に関し、もう少し知識を深めて行こうと言う事で、日本赤十字社（以下、日赤と略す）事業局国際部の永積部長に御相談した処、紛争地内でも活動を行なった方と言う事で国際部国際救援課救援係長松山勇樹様を御紹介戴きました。「イスラエル・ガザ人道危機及びウクライナ人道危機関連」と言うテーマで、本日は卓話を御願ひして有ります。松山さんの活動は、「国際赤十字・赤新月社連盟」（以下、国際赤十字と略す）の活動の一環として行われて居るものです。

松山さんの卓話の理解を助ける為、前振りとして、国際そして日本の赤十字に関して、簡単に、会長要件の時間を使って話させて戴

きます。第一回ノーベル平和賞受賞者で有る、スイスの実業家アンリー・デュナンは、1859年、イタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノで悲惨な有り様を目の当たりにし、放置されていた負傷者の救護活動に当たりました。

「傷ついた兵士は最早兵士では無い、人間で有る。人間同士として其の尊い生命は救われなければ成ら無い」ジュネーブに戻ったデュナンは、此の時の様子を「ソルフェリーノの思い出」として著し、国際的な救護団体の必要性を訴えました。本書はヨーロッパ各国で大きな反響を呼び、1864年にはジュネーブ条約が調印され、国際赤十字組織が誕生しました。日本では西南戦争中の医療救護が最初で、日赤も戦争に絡んで出来た組織です。国際組織名は、中東が加入する際に十字軍を思わせる旗は掲げられ無いと言う事で、赤新月社が名前に追加され、国際赤十字・赤新月社連盟と成り、世界191の国が加入して居ります。日赤は国際赤十字の中でも一番構成員の多い赤十字社で、その次はドイツ、アメリカと続いて参ります。そして、日赤は、国際赤十字の中で、中心的な役割を果たして居ります。2代前、前々日赤社長の近衛忠輝さんは、二期8年間、国際赤十字の会長をなさいました。日赤の施設別職員数は、医療施設91病院が最も多く、次いで血液事業、各県支部の順に成って居ります。此れ程、医療施設が多い国際赤十字参加国は無く、殆どの国は病院を持って居りません。日本に赤十字病院が多いのは何故かと言いますと、太平洋戦争の折りに、戦時下医療救護員養成を担う施設として、一県に一赤十字病院設立が国策で有ったからです。八戸赤十字病院も昭和18年8月1日、太平洋戦争の最中に設立されて居り、昨年で創立80周年。今年81年目と成ります。

次に、「国内災害義援金（以下、義援金）」と「海外救援金（以下、救援金）」に関しても少し御話しさせて戴きます。日赤は、国内で大規模な自然災害が発生した場合、被災者に対する義援金の受付を行ないます。全国から集まった義援金は、「全て」被災地域の義援金配分委員会に送られ、被災者の為に使用

されます。そして今、世界の各地でも自然災害が起り、武力紛争等による被害が発生し、被災者の状況は、一層深刻なものに成って居ります。こうした状況の中で苦しむ人々の為に、日赤と国際赤十字が行う緊急支援や開発協力活動の資金として、救援金が活用されて居ります。

＜「日本赤十字社」東日本大震災～世界から寄せられた支援の報告＞と言う、動画を供覧。動画では、クウェートからの400億円を超える救援金を含め、総額1002億超の救援金を全世界から戴いた事。そして其の救援金を、日赤は、被災者への家電セットの寄贈等の生活再建、仮設診療所の整備等の医療支援、防災倉庫の設置等の災害対応能力強化、スクールバスの整備・奨学金制度等の教育支援、被曝量測定器の整備等の原子力災害対応、介護用ベッドの寄贈等福祉サービス、の為等々の様々な事業に使わせて戴いた事が述べられて居ります。そして動画の最後は、「日赤は復興支援の指針や計画を各国の支援国と共同して来ました。其れは戴いた支援に対する感謝と説明責任を果たすと共に此の貴重な経験を各国と共有し、将来に備える為。」と、結ばれて居ります。

此の様に我々、日本は、東日本大震災時に限らず、世界中から色々な支援を受けて居ります。ウクライナもガザも中々我々が入れる所では有りませんが、海外で起きた事に目を瞑ると言う事では無く、知った上で何が出来るか、何が御返し出来るかを、時々で良いので考えて行きたいと思ひます。

松山さん、1時からの卓話宜しく御願ひ致します。

幹事報告 松本 剛典 幹事



4月13日(土)東第一・第二グループ合同インターシティーミーティングがむつ市のプラザホテルむつで開催されます。参加申込みご希望の方は事務局まで申し込みをお願いします。

委員会報告

親睦・会場委員会

栗谷川敏彦委員



○ニコニコボックスの報告

- ・誕生祝 築館智大さん
- ・奥様誕生日 峯 正一さん
- ・結婚記念日 峯 正一さん

吉田賢治さん 今日松山先生のゲストプレゼンテーションにお声がけいただき楽しみにしてまいりました。

道尻誠助さん 栗谷川さんの栗栗とした瞳に明日の八戸RCの輝きを発見しました。

小林幹夫さん 2ヶ月ぶりの出席です。

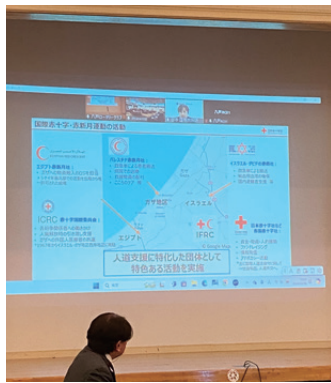
小井田和哉・佐々木泰宏
山村和芳・夏川戸 齊さん } ニコニコデー

ZOOMでのプレゼンテーション

「イスラエル・ガザ人道危機及び

ウクライナ人道危機関連」

松山 勇樹さん



どちらも大きな事業ですので、短時間でポイントを伝えるのが難しいかと思えます。ちょっと駆け足になってしまうかもしれませんが、なるべく分かりやすく

お話しさせていただければと思います。最後には質疑応答の時間を持てればと思います。

まず、イスラエル・ガザの人道危機です。こちらに地図を2つ用意しています。まずはガザの人道危機、武力紛争の現状です。昨年10月7日にガザからイスラエル側への武力攻撃があり、そこから始まった今回のイラク紛争の現状がどうなっているかを簡単にお話します。

イスラエル、ヨルダン川西岸地区を含むパレスチナ自治区の地図をご覧ください。横に

エジプト、右にヨルダン、上にはレバノンとシリアがあります。今日は主にガザの話させていただきますが、今回ヨルダン川西岸地区でも実効紛争が発生していたり、レバノン南部でも武力行使が発生していて、今回の衝突はガザのみならず、周辺地域も含んだ大規模なものになっているということは、皆さんニュースなどでご存じかと思えます。

ガザの中の戦争研究所はアメリカのシンクタンクのwebサイトで公開されていますので、もし興味がありましたらアクセスしてください。ガザ地区の青いところはイスラエル軍ウイニング・オペレーションとありますが、掃討作戦といわれています。当初は北の方から段々と南の方に衝突の前線が移動していったと思いますが、現在もまだ北部のほうでも戦闘が行われています。南部でも現在激しい戦闘が繰り返されています。

このような状況に対して赤十字がどのような活動をしているか。まずは地元の赤十字社、赤新月社が賢明な各種人道活動を展開しています。まずイスラエル側の方で起こったものに関してはイスラエルの赤十字社、イスラエルダビデの赤盾社が主にプレホスピタルケアというファーストエイドを含む救急搬送、初期対応を主にやっています。さらに日赤と同じで血液の確保、住民の安全なところへ避難させるといった避難者誘導などを初日から対応して、今も継続してやっています。

ガザの中はパレスチナ新月社が賢明な活動を続けています。彼らもプレホスピタルケアさらにはパレスチナ赤新月社は病院を1、2つもって自分たちで運営していて、ホスピタルケアに関しても独自の活動を展開しています。その他、メディカル以外にも救援物資の配布、心もケア等も含めた幅広い人道活動を展開しています。

エジプト新月社はガザへの救援物資の支援はエジプトとの国境のラファというところからしか受け入れないということになっていて、エジプト地元のエジプト赤新月社がとても大きな役割を担っていて、救援物資のガザ地区への搬送を一手に引き受けています。赤十字

の中だけではなく、国連機関、他のNGOとも連携しながら仕事を請け負って赤新月社が実施しています。

さらには国際赤十字はまずICRCは今言った人道支援活動を地元の赤新月社と共にやっていますが、それ以外に独立した活動として、より中立的な立場から両軍関係者に働きかけて、人道支援活動を行うためのスペースを確保するなどの努力をしたり、現在も140名以上のイスラエルの方もしくは外国人の方がガザで人質に取られている情報がありますが、そういった人質が解放された時もイスラエルに帰るためのいろいろな支援もICRCが担当しています。中でもガザ地区内病院の医療支援もやっています。

一方でIFRCは各国赤十字、赤新月社の調整を行う期間です。こちらは主に周辺各国の赤新月社と日赤を含む支援をしようとしている赤十字社との間の支援の調整を行っています。

イスラエルのダビデ社のプレホスピタルケアのスタッフ、救命救急士の方の活動の映像、献血募集。モバイル採血車の活動を展開しています。パレスチナ新月社の方は主に救急搬送。プレホスピタル、病院への搬送を含めたホスピタルケアを展開しています。赤新月社は毎日毎日大量の支援物資をガザ地区内に運び込むようにいろいろなロジスティックの構築に奔走しています。

では、ガザ人道危機について、日赤ではどのような支援を行っているかということですが、基本的には現在のところ現地での人道支援活動は資金面で支援するということが、海外義援金を10月17日から募集しています。今月末までの予定だったものを半年間延長して引き続き義援金の募集を続けています。これまでのところ、イスラエルのダビデ社赤盾社、パレスチナ赤新月社、IFRC、ICRCの4つの機関に対して基金支援を行っています。特に当初はそれぞれ等しく送っていましたが、その後、特にパレスチナ赤新月社、ICRCに追加資金支援をしてい

て、合計1億4000万円ほどの資金支援を行っています。

ICRCとパレスチナ赤新月社の話をします。ICRCは人質が解放されたときに、ガザまで搬送したり、人質解放に雇う支援をやっています。10月末までに109人の人質解放支援をやっています。武力紛争によって家族と連絡が取れなくなってしまったという問い合わせが多数寄せられていて、これまでに6000件弱の家族を探すための問い合わせに対して対応しているところです。その他、イスラエル側に拘束されたパレスチナの方に対する同じく解放されたときのパレスチナ側に戻る支援も254件あります。ユニークな活動として身元の動静。遺体と等に関してしっかり身元を確認して、ご家族の元にお返しする活動もしています。

特に医療面ですが、地元のヘルスファシリティ、一番大きなものではガザ・ヨーロピアン病院という地元も大きな病院がありますが、そちらは以前から支援していますが、そちらに精鋭の国際スタッフを送り込んでいます。国際スタッフの中に入りながら、一生懸命医療機関をサポートしています。本当に多くの怪我人が毎日運ばれてきて、とても限られた医療リソースを使いながら、毎日数多くの外科系手術を行っているような投稿が見られます。こういった形で1月末までに1320件の外科のオペレーションを行う実績も届いています。

一方でパレスチナ赤新月社の方ですが、ガザ地区内に病院を2つ持っているという話をしましたが、一つは北部ガザ市にあるアル・クッズ病院は10月以降多くの怪我人が運ばれると共に、避難する方も病院の中に入っていて、とても混み合った状況でした。しかし11月に入って病院の近くで戦闘が繰り広げられるようになって、やむなく南部のほうに患者さんを搬送しながら避難するという決断を下して、一旦こちらの病院を離れざるをえないといった状況になりました。日赤は当初アル・クッズ病院に技術支援で前々から入っていました。アジア人の女性は大阪日赤の看護

師さん、助産師さんを派遣していました。でするので、今回の病院の退避はわたしたち日赤にとってもたいへん心の痛いきごとでした。現在こちらのアル・アマル病院というより南部のもう一つの病院や他の公立病院にも転送していますが、こういう病院に、拠点を移して活動を継続しています。

看護師も10月時点はガザにいましたが、状況が悪くなって退避しなければいけない状況になりました。帰ってきて記者会見を行いましたので、YouTubeをご覧いただければと思います。現在、戦線が南部のほうにも移っていて、アル・アマル病院の周りも状況がとても厳しいものになっています。先週、病院の活動を継続できない状況になってストップしています。一方でこの近くにテントで野戦病院みたいな形で緊急の医療施設を作って、そちらで患者さんのケアに当たるというような努力も引き続き続けられています。

以上がイスラエル・ガザ地区の簡単な報告です。ここで一番ポイントとして挙げられるのはやはり付帯人同胞の遵守ということだと思います。ご存じの通り、国際人道上、病院を含めた医療施設に関しても保護すべき対象ということで規定されています。こういった観点から、付帯人同胞の順守がわたしたちが人道支援を続ける上でもたいへん重要になっています。

付帯人同胞に関して簡単な解説の動画がありますので、ぜひ見てみて下さい。

続きまして、ウクライナの話をしてします。先月2月に紛争激化してから2年になりました。ウクライナは2014年くらいから実は紛争が始まって、今年はそれから10年目の節目を迎えています。いまだに合計で1000万人ほどの方々が国内外に避難しており、多くの方が何らかの人道支援を必要としています。攻撃も戦線はウクライナ南東部のほうにあります。そこから離れた首都キーウにも今年に入ってから大きな攻撃がありました。1月2日にあった大規模攻撃のようすです。そこで地元の公的なサービスと一緒にウクライナ赤十字

社の緊急対応チームが一生懸命活動を続けています。

ウクライナは戦線が南東部にかけてあり、その周辺で最も激しい武力衝突がされています。一方でキーウや西のリビウなど全国各地に飛んできていて、戦線以外でも武力紛争に関わる人道危機が発生しています。周辺国の状況は、ウクライナから出た方は難民として国外に逃れた方はロシアにも多くの方がいますし、ポーランドをはじめとする周辺国、ドイツ、チェコにも多くの難民が逃れて身を寄せています。

わたしたち国際赤十字としてはまず地元のウクライナ赤十字社、周辺国に関しては、ロシア赤十字社を含めた各国の赤十字社が難民の受け入れ、難民への人道支援活動を展開しています。そういったものの調整をIFRCで行っています。IFRCはその地域の赤十字の人道支援活動の調整をしています。捕虜に対する人道支援活動などを展開しています。赤十字ではとても大きな人道支援活動を2年間で届けてきました。衣食住から保健、水、安全な所への避難、離れ離れになってしまった家族の照会など、ありとあらゆる人層支援活動をしています。

今年の1月に赤十字の中でウクライナ会議があり、今の現況の進捗の共有、課題が何なのか。ウクライナ赤十字社は中長期的に人道支援活動をやっていかなければいけないだろうということで、主に保健分野やソーシャルサービス分野、緊急危険分野を3つの柱として活動を続けながら組織強化にも取り組んでいく、という話がありました。

一方で最近はイスラエル・ガザをはじめとするその他のいろんな人道危機もありますので、ウクライナに関する関心の低下と資金の低下といったところの懸念が表明されました。それから周辺国に逃れている方がいっぱいいますが、調査するといつかはウクライナに帰りたいとみな思っているようですが、近々に帰るという方は2割に満たない。しばらくはその国のコミュニティで暮らしていくということになります。ということで、そのコミュ

ニティの統合に対する支援が今後鍵になるだろうと、周辺国に関しては言われています。

日赤はお陰様で91億円以上の海外救援金をお寄せいただきました。そのうち25億円ずつを国際赤十字と連盟 I F R Cにお送りし、残りの40億円くらいを日赤、主にウクライナ赤十字社との二国間支援事業に使っていきたいと考えています。日赤とウクライナ赤十字社の二国間支援ですが、三大分野に対してそれぞれいくつかのプロジェクトをこのように展開しています。主に西部地域での事業になります。こちらはいずれもウクライナ赤十字社が立てている三か年計画に沿ったものとなっています。

現在、わたしが代表代行ということでキーウに数か月に1回くらい足を運んで、いろいろな事業の調整を行っています。それ以外にも医療管理を担当している人、日赤病院からも薬剤師、理学療法士を主に保健分野の技術協力の形で現地に送っています。

今年の1月にキーウに行ってきましたので、その時の写真をご覧ください。去年の冬は電力施設のアタックなどがあり停電などが本当にひどくて、行っていた当時間も真っ暗になったりしていましたが、今は電力も安定していました。一方でキーウ中心の教会の壁は戦死された方の遺影を壁に貼っていて、わたしがキーウを訪れるたびに戦死者の写真が増えていって、とうとう壁の最後まできてしまいました。

そんな状況ですが、キーウの状況はお伝えするのがなかなか難しいです。日常生活はふつうに営まれています。レストランやスーパー、カフェもあります。人々も元気にくらしているところです。ですから都市も普通の生活と戦争が入り交じったような、そんなような不思議な感じになっています。キーウのスタッフも忙しいながら皆さん元気に働いています。ウクライナ赤十字社の保健スタッフ、I C R Cのスタッフにも世界各国から国際要員が入ってキーウで仕事をしています。街もお子さん、至る所にストリートミュージシャンがいたり、ボルシチの美味しいレストラン

も開いています。

日赤が支援した救急車はトヨタのランドクルーザーでストレッチャーが後ろに入るような形の救急車です。この救急車も激戦地の近くのバフムトの近くの郊外の町で使用されています。わたしがキーウにいた時にたまたまメンテナンスで来ていたので、緊急支援チームの人たちと写真を撮りました。こういった形でわたしたちの支援も着実に彼らの地元の人道支援活動に届いているかと思います。

イスラエルのガザ、パレスチナもウクライナもそうですが、わたしたち赤十字の強みはこういったように各国に赤十字社があって、それをつなげる国際赤十字のネットワークがあって、そういった国際・国内のネットワークがまさに強みだと思います。ウクライナでは国連機関とも共同しながら人道支援活動を展開しています。これからもこういった赤十字の活動をガザでもウクライナでも続けて参りますので、皆様引き続き温かいご協力を現金等でいただけたら幸いです。



質疑応答

Q 1 松林：貴重な話をありがとうございました。青森の新聞社に勤務しています。先ほどガザの話の中で、当然戦闘地域ということですが、滞在スタッフのスケジュール、だいたい何日滞在で交代などは決まっているものですか？

病院が拠点になっているとは思いますが。そういうところが使えなくなったときにテン

トを出して拠点にするというお話がありましたが、その拠点を決める場所は、紛争地域でするので、あまり危険なところだとダメでしょうし、逆に離れすぎていてもだめでしょうし。そういった拠点を決める情報収集はどういった形で行われていますか？

A1 松山：スタッフのローテーションは地元のパレスチナ赤新月社は元々、地元で活動し地元で暮らしている方たちなので、国際要員のローテーションとはまた別かなと思います。ICRCの国際赤十字がガザ・ヨーロッパアンホスピタルで行っている医療支援は外国の医療要員が入っています。まだ日赤は残念ながら人的貢献はできていないのですが、聞くところによるとたぶん1か月4週間くらいでローテーションを組んで、もしかしたら引継ぎでプラス1週間ずつ、1か月～1.5か月くらいの間で回しているというような話は聞いています。

国際要員の生活環境もだいぶ厳しいもので、なかなか厳しいミッションだと言うことは聞いています。

スペースに関しては、まさに重要なお質問だと思います。わたしたちも人道支援を提供するためのスペースの確保をたいへん簡単ではなく、苦勞しながらわたしたち赤十字は担っています。まさにそこはICRCが両サイドにいろいろな話をしながら、避難者の誘導や人道サービスを提供するためのスペース、時間帯、場所を交渉しながら確保していく、そういう形でのアプローチになるかと思います。ですので、今回のアル・アマル病院の野外テントでのスペースもICRCの支援を受けながら、パレスチナ赤新月社と、イスラエル側とパレスチナ側双方と交渉しながら、時間帯や場所的スペースを確保しているということが現地で行われていると思います。

紺野会長：現地に行かれてすばらしい活動をなさって本当にお疲れ様でした。また引き続き被災地での活動をしっかり赤十字社の代表としてやっていただきたいと思います。きょうは本当にありがとうございます。

出席報告					出席委員会		
第3305回例会（3月6日）			第3303回例会（2月21日）				
出席率		54.8%	出席率		58.1%	修正出席率	61.3%
総会員数		64名	出席数	34名	総会員数		64名
					メイクアップした人数		2名
出席義務会員	出席免除会員	欠席数	出席義務会員	出席免除会員	欠席数		24名
62名	2名	28名	62名	2名			